

C「ヒュームとスミス」(スコットランド啓蒙思想研究)

世話人 篠原 久 (関西学院大学・名)

報告者 野原慎司 (東京大学)

討論者 木宮正裕 (常葉大学基礎教育センター)・篠原 久

セッション趣旨

スコットランド啓蒙思想の(起源・継承・影響関係をも含む)多面的研究が本セッション主要テーマであり、今回は下記の英文新著を刊行された野原氏にその第7章を中心に「アダム・スミスの歴史政治学——四段階理論の位置付けをめぐる」というテーマで、自著の紹介を兼ねて報告していただいた。

Shinji Nohara, *Commerce and Strangers in Adam Smith*, Springer, 2018.

報告要旨

アダム・スミスは、狩猟、牧畜、農業、商業と社会が四つの段階ごとに進歩するとの四段階理論の提唱者として知られているが、実際にはそのスミスにおける使われかたはあいまいな部分が多い。四段階理論は、スミスが政治制度の歴史的進歩を捉える枠組みの一環として存在するにすぎないのであって、このことは同時代の他のスコットランド啓蒙の思想家の歴史観にも共通している部分である。その歴史の枠組みは法の正当化の源泉とは何かをめぐる問いによる。すなわち、スコットランド啓蒙およびスミスにとって、歴史はイングランドとスコットランドの合邦体制のもとでの法体系をいかに正当化しうるのかという問題に直結するものであった。

木宮正裕氏による質問

- 1) 法・政治制度が独自の過程を辿るとされるが、スミスが四段階理論を用いて説明することで、それをを用いない場合に比べて見えてくるものは何か?
- 2) 外国人の権利の議論の位置付けについて。それは経済決定論ではないのか?
- 3) 法・政治制度の進化にとって人々の自由の保護があるとしているが、「常備軍論争」で示された秩序としての自由と、法・政治制度としての自由の相違は何か?
- 4) スミスが経済史に言及した際、段階論の枠組みを用いなかったのはなぜか?

報告者からの木宮氏へのリプライ

- 1) 四段階理論を用いることで、むしろ生活様式と財産形態・政府形態の対応関係が明瞭になる。ただ同時に、四段階理論は、法・政治制度の進化過程の一環として説明されて

いる。そのことは、スミスの四段階理論も法・政治制度の進化論も、状況に応じて法は変わりうるのであり、イングランド法のように古さのみを法の正当化の源泉とするのは誤りであるとして、スコットランドにおける法の変化を正当化する含意を有している。

- 2) 法・政治制度の進化により、外国人の権利の保護が必要となるとスミスは考えているが、それは経済決定論ではない。なぜなら、不安定な外国人の権利を保護することは、外国貿易や国際商業を活発にするという意味で、政治が経済のあり方を決定づけているからである。
- 3) 常備軍のあり方についてのスミスの議論で示されたのは、政府（王）と貴族・民衆の権力の均衡に自由がみられるという民兵論者の立場を否定し、政府による軍事力の掌握が、むしろ貴族による無秩序を抑制するという意味で人々の自由をもたらすという主張である。他方で、スミスは民兵に一定の役割を認めているが、それは民衆の市民として能力の維持の問題からであり、上述の権力均衡論の立場の観点からではない。権力の一元化による秩序が、政府による人々の自由を可能にしたというのがスミスの考えであった。
- 4) 農業社会から商業社会への移行という意味で、段階論が部分的に用いられてはいるが、四段階の理論が用いられなかったのは、それを用いる必要がなかったからである。四段階理論は、政府の起源と発展を述べる場合に主として用いられ、人々の経済活動の発展を述べる場合にはあまり重要ではない枠組みであった。

篠原による質問

- 1) スミス『国富論』の第1篇から第4篇まで四段階理論が出てこないとされているが第3篇では農業社会としての封建社会から商業社会への移行論ではないのか？
- 2) ヒュームにおけるマグナ・カルタ成立への貴族の貢献の議論と、スミス『国富論』第3篇第3章での国王の貢献の議論との関係についてどう理解するのか？
- 3) コマースとストレンジャという二つのキーワードをめぐる、スミスの道徳理論の特徴は、新著ではどのように捉えられているのか？

報告者からの篠原へのリプライ

- 1) その通りである。第3篇では、農業社会から商業社会への移行が、中世から近世への歴史的移行過程の観察の中で取り扱われている。同時に四段階理論の第1段階の狩猟社会も第2段階の牧畜社会もそこで出てこないことも事実である。
- 2) ヒュームもスミスも、貴族の権力の減少に自由の確立過程を見出している点では共通している。ただし、国王が貴族の権力を奪い絶対権力を確立させたことをヒュームはより否定的に見ており、スミスはそこに人民の自由の確立を見ていた。

3) スミス道徳理論における道徳性の基礎は、人が自己を他者のように公平に観察することに基いている。そこでは自己自身の公平な観察者は、自己自身を「見知らぬ人ストレンジャーズ」からの目線で観察することに依拠している。だが、それはあくまで自己評価であり、他人との道徳観の違いも生じる。しかし他人との交流（commerce には交流の意味もある）を通じて、正義や道徳という社会の基本ルールについての考えの違いを修正することができる。

フロアからの発言としては、スミス道徳理論における「事情に精通した観察者（well-informed spectator）」の意味、「親密な人々」の間の同感（共感）の意義、『国富論』と『道徳感情論』との関係等についての質問があった。

なお、当日の出席者は10数名であった。

（篠原 久）